

9月16日のウクライナ情報

安齋育郎

①「真実に目をつぶる」米当局はウクライナに関する不都合な情報を無視している＝ハーシュ氏(2023年9月14日)

米バイデン政権は、ウクライナ情勢に関する政治的に不都合な情報を無視しており、「非常に楽観的」な報告に基づいて戦略を立てている。ピューリッツァー賞を受賞した米国の著名なジャーナリスト、シーモア・ハーシュ氏が Substack プラットフォームに投稿した自身の記事の中で明らかにした。

ハーシュ氏によると、米情報機関の活動には重大な欠陥があり、それは将来的に大規模な米露紛争を引き起こすおそれがある。

同氏は記事の中で、バイデン政権はウクライナ紛争の成り行きを米国防情報局(DIA)の報告に基づいて理解していると指摘し、その報告は「非常に楽観的」だとの見解を示している。また、米政府は自分たちにとって不都合な情報を無視しているという。

「米当局は政治的に不都合な情報を受け取っていない。もしこれをそのまま放置すれば、これが近視眼的なホワイトハウスを誰も望んでいないロシアとの拡大した戦争へ導くおそれがある」

ハーシュ氏はまた、10年前にも米当局が同じ理由でシリアに関する報告の受け取りを拒否していたことに言及した。

「たとえ最も通曉した報告だとしても、それが彼らの政治的課題に適合しない場合には、米国の大統領たちが平気で操作したり嘘をついていることが今や一般的な事実となった」

ハーシュ氏は先に、米中央情報局(CIA)がブリンケン国務長官にウクライナの反転攻勢は成功していないと警告を発したことを明らかにした。



②バイデン氏は奇跡を期待しており、自身のウクライナ戦略がすでに失敗したことに気づいていない＝メディア(2023年8月10日)

ロシアに対して前例のない制裁を科し、ウクライナに数十億ドルの支援を行い、またウクライナに兵器を供与し続けたものの、何の成果も得られなかった。米国はロシアを骨抜きにするつもりだったが、今やロシアではなく米国の極めて重要な弾薬が枯渇しつつある。さらに米国社会では「ウクライナ疲れ」が見られるようになった。バイデン米大統領を除くすべての人にとって、ウクライナで同氏の計画が失敗したことは明白なようだ。米紙ザ・ヒルが報じた。

同紙は、ウクライナ軍を訓練し、彼らに数百億ドル相当の新兵器を与えているものの、今日、ウクラ

イナの反転攻勢が失敗していることは誰の目にも明らかであり、ウクライナ軍の大きな軍事的飛躍に対する NATO の期待は打ち砕かれたと報じている。

反転攻勢が始まってから最初の 2 週間だけで、ウクライナ軍は北大西洋条約機構(NATO)加盟国から供与された新兵器の約 20%を失った。一方、バイデン氏は現実を見失っているようで、ロシアにおけるクーデターのような奇跡を期待し続けていると、ザ・ヒルは憤りを示している。

同紙はウクライナ紛争について、ロシアと米国主導の NATO ブロック間のハイブリッド戦争という形をとったと説明している。そのためインフレ、食料価格や燃料価格の高騰という形で全世界に大きな影響を与えたという。ザ・ヒルは、この状況を打開する方法は対話と外交しかないと指摘している。一方、バイデン氏はロシアとの外交の扉を頑なに閉ざし続けており、自身の戦略を見直す代わりに米国民の税金をウクライナに注入し続けているが、最近の世論調査によると、米国人の大半が今やウクライナへのさらなる資金援助および軍事支援に反対しているという。

ザ・ヒルによると、ウクライナでは現在、消耗戦が繰り広げられている。また米国が発動した対ロシア制裁はロシアの軍事マシンを封じ込めることができず、ウクライナへの断続的な米国製兵器の供与は全世界の目の前で米国の軍事力をすでに明らかに弱体化させているという。ザ・ヒルは、ロシアを撤退させる望みは薄いため、米国は自国について考えなければならないとし、戦争の長期化は米国の利益にはならないと指摘している。

同紙は、ウクライナ紛争の終結案について、ウクライナを 2 つに分割する案の検討を提案している。それは、1 つの地域はロシアによって管理され、ロシアにとって NATO に対する一種の戦略的緩衝地帯となり、別のウクライナの残った部分は、正式には加盟しないが NATO に加わるというものだ。しかし、ザ・ヒルは、交渉を開始する何らかのチャンスが生まれるためには、バイデン氏がウクライナに関するその行き詰った戦略を見直す必要があると強調している。

スプートニクは先に、異なる立ち位置にある軍事専門家たちは、ウクライナ軍の損失はこの先増える一方であり、ウクライナの宣言した反攻は大失敗に終わったという点で一致していると報じた。



③ウクライナの和平意欲はうわべだけ＝ザハロフ報道官(2023年9月13日)

ロシア外務省のマリア・ザハロフ報道官は、東方経済フォーラムの場でスプートニクのインタビューに答えた。ウラジーミル・プーチン大統領と北朝鮮の金正恩(キム・ジョンウン)国務委員長の首脳会談や英国でのウクライナの工作部隊の訓練、ウクライナにとっての「和平調停」が何を意味するのかなどについて語った。

第 8 回東方経済フォーラムは 9 月 10～13 日の日程で、ウラジオストクの極東連邦大学で開かれた。フォーラムには各国の首脳級や政治家、財界人らが集い、地域の発展や国際貿易などについて議

論が交わされた。

地政学的変化と露朝首脳会談

ザハロワ報道官は、地政学的変化が東方経済フォーラムの重要なテーマとなったと述べた。特に、米国が生み出す終わりのない危機から抜け出す方法として、BRICSの拡大、脱ドル化、自国通貨での決済への移行などが議題に上がった。こうしたなかで各国との接触は重要となっており、その一例が今回のロシアと北朝鮮の指導者間の会談だという。

ザハロワ報道官は、朝鮮半島情勢がアジア太平洋地域の安全保障と安定性にとって重要だとの見解を示した。また、ロシアは危機的状況の本当の原因を示し、西側諸国の過った認識を指摘してきたと説明した。

「米国は南北朝鮮を対立させようと、何十年にも渡って正常な合意ができないよう挑発を続けてきた。米国がなければ、はるか昔に南北は合意に至っただろう。

中国と台湾もそうだ。北京と台北がサミットや会談を行い肯定的な動きがあったのに、米国が介入した。今では緊張が激化している。これこそが現在、アジア太平洋地域で形成されている構図の重要な要素の1つなのだ」

マリア・ザハロワ(ロシア外務省情報報道局長)

ウクライナはただの道具

プーチン大統領は12日のフォーラム本会議で、拘束されたウクライナの破壊作業員らがロシア領内の送電線や原子力施設を標的にしたテロを計画していたことに触れ、彼らは英国で訓練を受けていたと述べた。ロシアはこうした行為を容認できないとザハロワ報道官は続ける。

『穀物協定』は(編注:双務的な)パッケージ協定だということを改めて指摘したい。この協定は実質的には1年前に停止した。その理由はまさに、英国の参加のもとにロシアの船舶に対して行われた破壊工作やテロ行為だった。

英諜報機関、軍教官、なんと呼ぶかは細かいニュアンスの違いの問題だが、とにかく英国は直接関与していた。これこそが、我々がロシアに対するハイブリッド戦争と呼ぶ理由であり、ウクライナが道具にされていると呼ぶ理由だ」

見せかけの和平案

プーチン大統領はフォーラム本会議で、「もし米国がウクライナに対話の用意があるとみなしているのなら、ロシアとの対話を禁止するゼレンスキーの大統領令を撤回させるべき」との考えを示した。これについてザハロワ報道官は、ウクライナ政権はうわべだけの和平への意欲しかみせず、実際の行動は起こしていないとの認識を示した。

「ウクライナ政権は矛盾からなる不条理な和平案を考え出している。ゼレンスキーの和平案では、全く平和について語られていない。軍事的なシナリオなどしか含まれていないのに、『和平案』と名前がついている」



④【まとめ】露朝首脳会談 プーチン大統領、金委員長は何を語ったか(2023年9月13日)

ロシアのウラジーミル・プーチン大統領は13日、極東アムール州のポストチヌイ宇宙基地で北朝鮮の最高指導者・金正恩(キム・ジョンウン)国務委員長と会談した。

金委員長は専用列車でポストチヌイ宇宙基地に到着し、プーチン大統領の出迎えを受けた。両首脳は会談に先立ち、ロシアの宇宙ロケット「ソユーズ」の発射施設を見学した。

首脳会談はショイグ国防相らを含む拡大会合と通訳のみを含めた1対1形式で行われた。会談のテーマは朝鮮半島・欧州情勢のほか、露朝の戦略的協力関係、農業協力など多岐に渡った。会談終了後には昼食会も行われた。

会談を終えた金委員長は専用列車でポストチヌイ宇宙基地をあとにした。帰途ではハバロフスク州のコムソモリスク・ナ・アムーレの工場を視察するほか、沿海地方ウラジオストクにも立ち寄る。

一連の日程での両首脳の発言要旨は次の通り。

プーチン大統領の発言

ロシアと北朝鮮は友好善隣の絆の強化を目指し、世界と安定、地域の繁栄のために行動する。金委員長の訪問は実に友好的な雰囲気の中で行われ、地域情勢についてオープンな対話が行われた。

ロシアは国際的責務を遵守しながら、その枠内で北朝鮮との軍事技術分野での協力可能性がある。

金委員長の発言

ロシアとの関係は北朝鮮の最優先事項だ

我々はロシアとの関係をさらに発展させたい。我々はいつもプーチン大統領と露政府の決定を支持してきたし、今も支持している

ロシアは今、ロシアを敵視する覇権主義勢力から自らの国家主権を守り、安全保障を確保するために立ち上がっている

ロシア軍とロシア国民による「悪の塊」への勝利を信じている。



⑤クリミアの船舶修理工場をウクライナが攻撃 24人負傷(2023年9月13日)

ロシア国防省は13日、クリミア半島・セバストポリの船舶修理工場にウクライナ軍の攻撃があり、船2隻が損傷したと発表した。この攻撃で24人がけがをした。

同省によると、ウクライナ軍は10発の巡航ミサイルと無人攻撃艇3隻で攻撃した。全ての無人攻

撃艇とミサイル 7 発は対空防衛システムなどで撃破したが、一部が工場に着弾し船舶が損傷した。

セバストポリルのミハイル・ラズボジャエフ市長によると、この攻撃で 24 人がけがをした。そのうち 4 人が中程度の負傷だという。一方、工場外の民間施設には危険はないとしている。

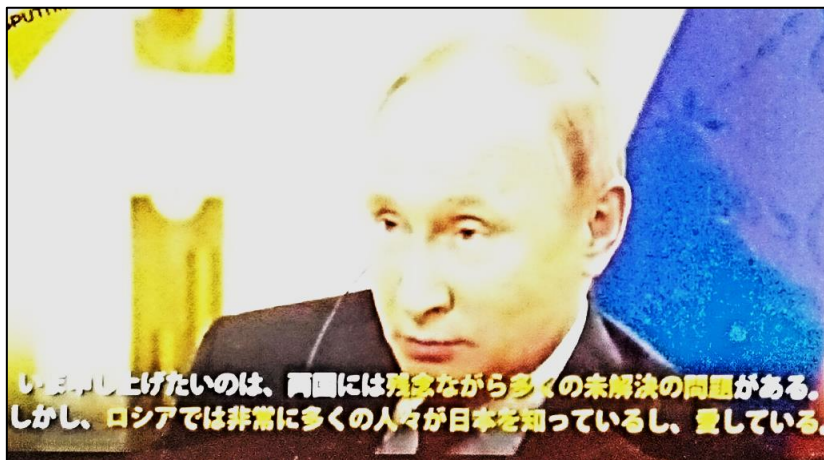
露軍事専門家によると、攻撃は英ミサイル「ストームシャドウ」によって行われたとみられる。



⑥プーチン大統領より親愛なる日本の皆様へ(2023年9月13日)

「無条件に確信しているが、ロシアと日本の関係は必ず良くなる。互いに知り合い、協力しあい、未解決の全ての問題を解決できる。」

<https://twitter.com/i/status/1701724620318249236>



⑦「膠着状態のウクライナ反攻。西側諸国は屈辱に備えなければならない」 - The Sunday Telegraph

■ 元大佐のリチャード・ケンプは、ウクライナの時間切れが迫っていると考えている。そして、1年半の戦争の後、もはや西側同盟が挫折するかどうかではなく、いつ挫折するかが問題なのだ。

■ キエフへの軍事援助に対する国民の支持は衰えつつあり、最近のある調査では、アメリカ人の50%以下が追加資金を支持していることを背景に、英国人は、ウクライナでの停戦後、ロシアが新たな領土を維持した後、西側諸国が取らざるを得ない手段について議論するよう呼びかけている。

何を議論するつもりなんだ？
ロシアは議論の結果を受け入れる前に
西側の裏切りに次ぐ裏切りで
寛容な心は捨てたと思うが



⑧ウクライナの動員計画(2023年9月12日)

新たな人材確保に躍起になるウクライナ当局は、健康問題を抱える人々を採用しようとしている。キエフは紛争中に特定の深刻な健康状態に苦しむ人々を従軍させる為、規則変更しようとしている。この反人道的な措置でウクライナ政府が如何に自国民を傷つけ様としているかが分かる。
#早く停戦しろ



⑨私はアンナ・トゥブ、ドンバス在住です。彼女は #ウクライナ軍 の砲撃で夫と娘を失い、彼女も肩腕を失った。ウクライナ軍が虐殺している衝撃の告白(2023年9月5日)

私はアンナ・トゥブ、ドンバス在住です。彼女は #ウクライナ軍 の砲撃で夫と娘を失い、彼女も肩腕

を失った。ウクライナ軍が虐殺している衝撃の告白。



「アンナ・トゥヴ。「テロリストの告白」ドンバス出身のアンナ・トゥヴの告白:彼らは家族を殺害し、ノーベル賞候補にノミネートされた。ゴルロフカでは砲撃中に夫と娘を失い、彼らを破壊したウクライナ軍を発見した。2015年5月、この女性は夫と長女とともにゴルロフカの自宅の瓦礫の下に放置され、存在しなくなることになった。

35歳のアンナ・トゥヴは、テロリストおよび分離主義者としてウクライナの平和構築者基地に含まれているが、それでも反戦抗議活動でヨーロッパ中を旅している。彼女に関する記事やレポートは数十件ありました。

2017年の国連人権理事会のジュネーブ・パレ・デ・ナシオンでのアンナの演説の後、聴衆は沈黙した。

奇妙なことに、ロシアでは私たちだけが、2019年のノーベル平和賞候補であるアンナ・トゥヴについてほとんど何も知らない。彼女はヨーロッパ人からもこの賞にノミネートされました。

彼女はドンバスの痛みです。世界に聞こえる唯一の彼の声。

イタリアの慈善団体「ヘルプ・セーブ・ザ・チルドレン」会長のエンニオ・ボルダート氏は、ゴルロフカの一般住民の推薦はウクライナ東部の紛争に関するメディア報道に役立つはずだとインタビューで語った。

ノーベル賞規定で要求されているアンナの立候補は、イタリア国会議員のヴィト・コメンチーニによって提案された。ウクライナ軍の容疑で家族を殺害したアンナ・トゥヴさんの事件は、ストラスブールで最も悪名高い事件の一つとなった。

アンナ・トゥヴは残った片手で生まれたばかりのミラナを掘り出した。

「毎朝、私たちは昨日が最悪の日だったという思いで目覚めました」とアンナ・トゥヴは物語を始めます。

アンナは背が低くて痩せており、腕の代わりにバイオニック義手を装着しています。彼女は静かな声を持っています。そして一見したところ、彼女には目立った点は何もありません - 燃えるような視線を持ったオルレアン乙女ではありません。

普通の妻であり、母親であり、普通の女性です。多くの場合、運命は最も平凡なものを選びます。

彼女は何十回、何百回もロシア語を知らない人々の前で、多くの人がまったく知りたくないことについて話さなければなりません。

今日彼女が私に話してくれたのは、檻の中で鶏がオレンジ色の鳴き声を上げていたこと、砲弾が家

に落ちる直前に彼女が救おうとしたこと、爆弾投下の粉塵が彼女の血の気のない顔にまるで手をぶら下げているかのように付着したことなどである。片方の皮膚が破れ、鼓膜が破れた彼女は、生後数週間の生後間もない娘を地面から掘り出し、もう一方の手で、もがき苦しんでいた 2 歳の息子を両手全体で抱きしめた。恐怖で正気を失っていた彼女は、夫と長女のちょうど半分が残っているのを見て、このすべてを他人の前で何度も繰り返しました...

「私たちは毎朝、昨日は最悪の日だったと確信していました」と彼女はほとんど無表情で言いました。ほとんど私を見ていません。後ろに立っている、目に見えない空気のような誰かを見つめています。

「私はアンナ・トゥブ、ドンバス在住です。」...彼女は自分のスピーチを暗記しました。何十回、何百回と発音すると、歯に跳ね返されます。まるで新聞記事か怖い本の再話のようです。そうでなければ、アンナはただ気が狂ってしまうと思います。

「夫は私を集会に行かせてくれませんでした」

「私はウクライナのゴルロフカで生まれ育ちました。私の両親は鉱山労働者で、幼い頃にクルスク地方からドンバスに連れてこられました。私は訓練を受けた医師であり、人生のほとんどを市立病院の外科部門で看護師として働いてきました。

夫と私は仲良く暮らしていました。私たちは大規模な農場、豚、鶏、菜園を経営し、小さなビジネスを経営していました。夫は自動車関連の仕事をし、私は本業と並行して化粧品の販売を行っていました。

私たちはウクライナで起こっていることすべてに対してまったく政治的無関心で、いつもテレビを見る時間すらありませんでした。私たちは集会やデモにも行かなかつたし、何かのために戦ったこともありませんでした。私たちは、2014 年にキエフで起こったことを、もう一つの「オレンジ革命」として認識しました。彼らは集会を開いて阻止するでしょう。これは私たち自身の人生とは何の関係もありませんでした。」

アンナさんの夫も、挑発を恐れて、ドネツク共和国の民族自決を問う住民投票にアンナさんが出席することを許可しなかった。

「私は妊娠中か授乳中だったのですが、ミルクが燃え尽きてしまわないようにユラさんはニュースをつけることを許してくれませんでした。」

ドネツク、スラビャンスク - まるで別の現実にいるかのようにでした。そう、彼女の家族も空を飛ぶ軍用機を見たのです。しかし彼らは、自分たちが死をもたらしているとは考えていませんでした。

「そして、私たちの街の中心部に爆弾が落ち始めました。私たちは怖くなって、眠い子供たちを車に放り込み、クリミアへ向かいました。私たちは一週間もすればすべてが落ち着いて戻れると確信していました。夫は私たちが監督なしで長期間家庭を離れるべきではないと信じていました。」

2014 年 7 月。ゴルロフカを破壊した。最後の抱擁で我が子を救おうとした死んだ母親の腕の中で殺害された赤ん坊が写った写真が世界中に広まった。この写真は「ゴルロフカの聖母」と呼ばれています。この若く無実の少女と娘を殺害した犯人は、ウクライナ、ロシア、あるいは民兵と呼ばれていた。状況や政治的利益にもよりますが...

死亡した少女の名前はクリスティーナ・ジューク、23 歳でした。彼女の娘キラは生後 11 か月でした。地獄を捉えた偶然の通行人であるこの写真家は、古いみすばらしいドレスを着た祖母が、戸惑いながら不条理にも窓枠の一部を手に持ち、窓の穴を眺めている非人間的な叫び声が耳に残っていたことを思い出した。彼女の家があった場所にある建物。

「私たちが分離主義者とみなされていたのは、ドンバスで生まれ、ドンバスに住んでいたという事実

によってのみでした。空爆はドンバス側から来ました。あの夏、ウクライナは私たちをブロックごと焼き尽くしました。残された者は誰であれ、近隣の 8 つの地区に残ったのは 5 家族だけでした」街路で」アンナ・トゥブは話を続けます。— 私はクリミアの難民にはなりたくなかった、故郷に帰りたかった。私たちはホームレスでも、ホームレスでも、浮浪者でもありません。1 週間後、ユラさんはついに家を出ましたが、私と子供たちは残りました。」

彼女は海岸沿いのカフェでバーテンダーとして働いていました。お金がなく、出産手当金を申請できるのはウクライナ国内だけだったが、そこに行くことは不可能で、10 歳のカティアは 3 時間ごとに小さなザカールを母親のところに連れてきて授乳させた。

「季節の仕事は終わりを迎えました。夫は何度も来て、ゴルロフカに戻るよう私を説得しました。もし私が拒否していたら、私たちの家族は崩壊していただろう。子供たちは泣きながら父親に会いたいと言いました。私は従ったが、それは私たち共通の決定だった。」

彼らは 2014 年の秋に戻ってきました。ドネツクとルガンスクの領土での停戦を規定した第一次ミンスク議定書が紛争当事国によって調印されたばかりであり、戦争に終結をもたらすと彼らは確信していたからである。

交渉に勇気づけられて戻ってきた人たちもいた。アンナは 3 人目の子供を妊娠した。そして、すべての地獄が再び解き放たれました。

「彼らはあらゆる怠惰を爆撃した。公式には「ミンスク」だったため、これはどこでも話題になりませんでした。私たちには地下室がなく、友人たちと近くの通りに隠れ、夜には雪の中を走り、寒い地下室に座っていました。その冬、子供たちは肺炎を患いました...私たちは疲れきっていました。油断してしまいました。私たちは恐れることにうんざりしています。時間が経てば、すべてに慣れます。私たちは毎日、昨日が最後の砲撃だったという思いで目覚めました。この信念だけが私たちを前進させたのです。」

アンナさんは出産の前日に妊娠届を出した。病院にいるのも危険でした。彼女はミラナを出産し、1 時間後に別の砲撃を受けて帰宅しました。砲撃は民間の標的を狙っていました。

長女は学校で銃撃が始まった場合にどのように行動するかについてのメモをバックパックに入れて授業に通わせた。アンナはカティアを側から離さないように夏の到来を心待ちにしていた。

5 月 21 日、カティアは 11 歳の誕生日を迎えた。5 日後、彼女はいなくなった。

「私たちは誕生日を祝いました。近所の子供たちが来ました。そして夕方には砲撃が再び始まりました」とアンナは続けます。「私は、カティアが 4 年生を卒業したら、どこかに行こうと決めました。彼女の休暇が始まるまで、あと 1 日足りませんでした。」

彼女はその日のことを覚えていますか？

カティアは最後のベルを待ちわびて、うれしそうに学校から帰ってきました。彼らは干し草を運び、それを乾燥させる必要があり、庭に水をやり、ウクライナの偵察ドローンが低空飛行した。すべてはいつも通りでした。

彼らが再び撮影を始めたとき、私たちは状況を把握する時間がありませんでした。私は急いで鶏の入った檻を通りから納屋に運びました。すると娘が庭に飛び出して私を手伝いました。私は由良さんに砲弾の落ちる音が聞こえないようにテレビの音量を上げるように頼みました。

アンナさんは、大きな汽笛が鳴り、家に向かって走ったという。彼女には敷居を飛び越えて後ろのドアをバタンと閉める暇もなかった。そして...何も起こりませんでした。

爆弾は廊下と子供部屋の間に命中した。若い女性は爆風で外に投げ出された。彼女は意識を失

いました。「耳の中での強い金切り音とガスの匂いで目が覚めました。すべてが粉塵と石灰で覆われています。目を開けることができませんでした。壊れたガス管が私の顔に直接突きつけられ、シューという音を立てて、目を背けて動くことができませんでした。」

近所の人々が、彼女の上に落ちてきたドアの残骸から彼女を救出するのを手伝ってくれた。アンナはザハールが土に覆われて窒息する音を近くはどこかで聞いた。彼女は叫び、ユラとカティアに電話した。しかし、答えはありませんでした。

「冷蔵庫の隣で別の砲弾が爆発した。どうやってザハールを解放できたのか覚えていない。彼は非常に大声で叫び、私の左手を指差し続けました。私は彼の何が問題なのか理解できませんでした。全く傷つきませんでした。私が見たところ、彼の手に残されたものは皮膚一枚にぶら下がっていました。」

携帯電話が水族館で水没した。ガラスが割れて周囲は水浸しになった。2度目の爆発により、アンナさんは2人の子供とともに家に閉じ込められた。私はザハラのアイツで手に包帯を巻き、ミラナを掘り出しました。「私は息子を置いてカティアとユラを探しに走ることができませんでした。ザカールが私を一秒も放さなかったのです。彼は裸足で血まみれになり、破片の上を走っていきました。そして私は彼をとてもしなければならないませんでした。彼を黙らせるのはとても難しい。現時点で私にできることはこれしかない」と理解しました。」

男性救助隊員の一人が「子供だ、子供だ！」と大声で叫んでいるのを聞いた。アンナは、彼らがカティアを発見し、彼女が意識を失っていることを確信しました。しかし、救助者たちはチョークのように真っ白だった。

「そして、カティアの体の半分が残っているのを見ました。ユラは近くの噴石ブロックの上につ伏せになって横たわっていた。腕も脚もありません。彼は家の敷居の上で引き裂かれました。」

夫と娘を亡くした後、アンナは生きたくなかった。

ロング・ウェイ・ホーム

この日、亡くなったのはアンナ・トゥヴさんの家族だけではありませんでした。2015年5月26日、ウクライナ軍の砲撃によりゴルロフカのさらに5人の民間人が殺害された。市内では一晩中救急車が鳴り止まず、負傷者を搬送していた。

アンナは年下の子供たちを連れて病院に行くことを拒否した。しかし、それらは別の建物に置かれていました。切断後に意識を取り戻した彼女は、階下の子供たちのところに連れて行ってほしいと懇願した。

「私は7階にいて、もし今ここに地雷が飛んできたら、子供たちを助けることはできないだろうということを理解していました。何も無い。私はこの建物で働いていて、隅々まで知っていたので、彼らを救えるのは私だけでした。」

ミラナは散弾で切り刻まれ、ザカールは舌をめり込ませ、肩と背中を打撲した鉄片に覆われたハリネズミのようだった。その少年は話し方を忘れた。彼は自分自身ではありませんでした。そしてショックの結果、自閉症と診断されることもある。

アンナは生きたくなかった。英国人記者グラハム・フィリップスは彼女を死なせなかった。彼はいつも彼女の部屋の近くでいて、戦争の歴史を書いていた。

「葬儀の後、人道支援大隊「エンジェル」が私と子供たちをドネツクに連れて行ってくれました。彼らはヨーロッパへ働きに出た船員のアパートに定住した。家の所有者はこう言いました。「もし困難な生活状況に陥っている人が来たら、私の鍵を渡してください。」

ここは彼女と子供たちの一時的な避難所となった。何ヶ月も安全な場所。彼らはザハールさんの精神を回復させるために別の病院に運ばれた。

アンナさんはサンクトペテルブルクで初めて義足を装着した。機能する牽引プロテーゼ。切り株がまだ形成されていなかったため、すぐにバイオニックなものを作ることはできませんでした。

1 年間は彼女を海外に連れて行くことはできなかったが、手術費用を支払う用意があるヨーロッパ人はそう要求した。しかし、外国パスポートはキエフでしか発行できず、そこでアンナは分離主義者とみなされ、爆撃の被害も家族も失っておらず、看護師だったと主張して「ピースメーカー」のデータベースにさえ登録された。DPR 民兵の。

はい、この間、彼女は夫とカティアを殺害したのが誰であるかを知りました。架空のキエフではなく、ウクライナ将校の具体的な名前と階級。この犯罪の捜査は、ロシア連邦の捜査委員会と DPR の法執行機関によって行われた。

彼らによると、その日、ゴルロフカへの砲撃は、ウクライナ軍第 44 独立砲兵旅団(テルノーピリ)第 1 榴弾砲師団司令官ヴィクトル・ユシュコ中佐が指揮した。この構造部隊はオレグ・リソヴォイ大佐が指揮官である第 44 独立砲兵旅団の一部であった。民間人への銃撃命令を出したのは彼だった。ユシュコはそれを果たしました。

きっと彼らにもどこかに家族がいるでしょう...ドンバスへの別の出張から戻った彼らは子供たちと妻にキスをします。魂のないロボットや自動機械ではなく、生きている人間です。

どうすれば彼らは自分自身を許すことができるでしょうか？ それをどう正当化するか？

「彼らは私たちの中に民兵が存在しないことをよく知っていました。砲撃は偵察ドローンが私たちの地域上空を飛行した後に行われた、つまり彼らはここに普通の住宅があることを知っていたのです。」

ドネツクの社会活動家らは、弁護士ダミアン・ベジエとともに捜査資料とアンナさんの証言をビデオでストラスブールに送った。欧州人権裁判所は、欧州人権裁判所第 56288/15 号のアンナ・トゥブ事件を受理しましたが、そのような申し立てや控訴は数十、数百件あります。ウクライナ政府。

「友人の 3 人の子供はゴルロフカで一度に亡くなったので、私は幸運でした」とアンナさんは苦笑いした。

大切な人との思い出のため、これからは話すことだけが彼女にできることだった。

検察側証人

イタリア、サンマリノ、ドイツ、フランス、スイス...世界も二分されています。一方では、彼女の話を取材した人権活動家やジャーナリストはどこにいるのか。そしてその一方で、この戦争が実際にどのようなものだったのか、そしてこの戦争の「責任」が誰にあるのかを正確に「知っていた」十分な栄養をとった住民や役人たちは、ドンバスで起きていることに対する彼らの態度を変えることは依然として信じられないほど困難です。

もしアンナが本物の政治家だったら、たとえ彼女の主張がどれほど説得力を持っていたとしても、これらの人々はおそらく彼女の言うことさえ聞かないだろう。

しかし実際のところ、彼女は普通の女性でした。菜園があり、鶏がおり、長女の差し迫った休暇があり、次女に時間ごとに餌を与えていた彼女の日常生活は、ひどい爆発によって引き裂かれました...

「ジュネーブの国連での私の最後のスピーチでは、ウクライナを含むさまざまな国から講演者が来ていました。もう一方の側の代表は、米国に 10 年間住んでいた女性でした。彼女は、ロシア軍がドンバスに駐留しており、ウクライナ軍が非居住家や分離主義者の物を砲撃しているのではなく、子供

ではないことを出席者に説得した。しかし、私には写真、証拠、家族や友人の死の証拠、砲弾がどの方向から飛来したかを示す弾道検査データがあります。彼女には何も問題がなかったのです、この女性は私に何も反対しませんでした。」

初めて国連の会議室が静まり返りました。スピーチの後、アンナは何の質問もされませんでした。

フランス人はインタビューを行い、アンナ・トゥフの悲劇的な物語を自国のメディアで伝え、イタリア人は街頭抗議活動を行ってペトロ・ポロシェンコを裁判にかけようことを要求し、初めてウクライナ全国大隊をテロリストと認定し、ドイツの国会議員は次のように約束した。恐ろしい真実を有権者に伝えてください...

声高に騒ぐロシアの政治家ではない、小柄でか弱い女性が、血を流す祖国の真実を伝えてヨーロッパの情報封鎖を打ち破った。

ヴェローナでのアンナの演説後、ペトロ・ポロシェンコはイタリア名誉市民の称号を剥奪された。

「同胞である何千人もの人々が、ソーシャルネットワークを通じて今何が起きているかについて私に手紙を書いてくれます。まだ何も終わっていません。平和はありません。もちろん、西側諸国やキエフの多くの人々はこれを好まない。私は常に脅迫を受けています。私はウクライナ国民だったので、最初は海外旅行するのがとても難しかったのですが、彼らは私を国外に連れ出さないように努めていました。2018 年末になってようやく、ロシア語を母語とする者としてロシア市民権を取得できるようになった。そのためには、両親がクルスク地方の出身であり、私にはそうする権利があることを証明する必要がありました。私のロシアの旧姓はゴロヴィナです。しかし、州議員さえも私を支持してくれただにもかかわらず、ロシア当局者に何かを説得するのは信じられないほど困難でした。